2026年度 洗足学園音楽大学 國末貞仁門下

LESSON RECITAL

レッスンリサイタル

2026.10.19 MON

18:15 OPEN / 18:30 START

洗足学園音楽大学

シルバーマウンテン B1F

GUEST TEACHER

貝沼 拓実 先生

PERFORMERS

傅 睿　Pf. 米丸 咲季子

犬伏 由奈　Pf. 原田 愛

粟飯原 叶翔　Pf. 原田 愛



PROGRAM

傅 睿 (大学院2年)　Pf. 米丸 咲季子

シアージュ
Sillage
V.ダヴィッド
V. David

パルス
Pulse
V.ダヴィッド
V. David

楚頌
Chu Song
李 博禅 (編曲:于昂)
Li Bochan (arr. Yú Áng)

――――休憩――――

犬伏 由奈 (学部2年)　Pf. 原田 愛

シャンソンとパスピエ
Chanson et Passepied, Op. 16
J.リュエフ
J. Rueff

ソナタ
Sonata
Ⅰ. Très modéré, expressif
Ⅱ. Noël
Ⅲ. Fileuse
Ⅳ. Nocturne et Rondel
F.デュクリュック
F. Decruck

ブリランス
Brillance
Ⅰ. Déclamé
Ⅱ. Désinvolte
Ⅲ. Dolcissimo
Ⅳ. Final
I.ゴトコフスキー
I. Gotkovsky

――――休憩――――

栗飯原 叶翔 (学部4年)　Pf. 原田 愛

アンダンテとアレグロ
Andante et Allegro
A.シャイユー
A. Chailleux

ラプソディ
Rhapsodie
C.ドビュッシー (編曲:V.ダヴィッド)
C. Debussy (arr. V. David)

ソナタ 作品19
Sonata, Op. 19
Ⅰ. With vigor
Ⅱ. With tranquility
Ⅲ. With gaiety
P.クレストン
P. Creston

傅 睿　Pf. 米丸 咲季子

V.ダヴィッド / シアージュ
V. David / Sillage

ヴァンサン・ダヴィッド作曲のソプラノ・サクソフォン独奏のための現代作品。私はこの曲に、音が消えた後に残る空間的余韻を表現の核と感じている。
伝統的な旋律進行を抑え、拡張奏法を活用。息、倍音、繊細な音色コントロールを軸に、音は微弱な響きから立ち上がり、凝集と拡散を繰り返し、空間の中で静かに消えていく。

私が目指す演奏
靄のような曖昧な質感を聴きどころとする。誇張した表現を控え、息の密度を調整し、儚く詩的な音場を作り、聴き手に音の残響を感じていただければと思う。

V.ダヴィッド / パルス
V. David / Pulse

ヴァンサン・ダヴィッドによるアルト・サクソフォン独奏作品。私はこの作品に、生命の鼓動を思わせるリズムの緊張感を感じる。
安定した旋律ラインを排し、息の揺らぎと強弱対比で音楽が展開。極弱音から始まり、緊張感が蓄積され、後半は力強い響きへ高まる。多彩な拡張奏法により豊かな音色変化が生まれる。

私が目指す演奏
「緊張と解放の対比」を大切にしたい。前半は抑えたリズムで静かな鼓動を表現し、徐々にテンションを高め、クライマックスで生命の躍動感を伝えられるよう努める。

李博禅 (編曲:于昂) / 楚頌
Li Bochan (arr:Yú Áng) / Chu Song

元は二胡作品で、サクソフォン向けに編曲された楽曲。項羽と虞美人の別れの伝承物語を題材とする。(※題材は民間伝承であり、確定した史実ではない)
中国古風の旋律を基調とし、緩急の大きな変化が特徴。二胡原曲の歌唱的な旋律をサクソフォンで再現し、前半は哀切で流れるような調べ、中後半は起伏が大きくなり悲壮な響きへ移る。長く伸びる音と繊細な音色変化により、惜別と無念の思いを託す。

私が目指す演奏
二胡原曲の古風な情緒と悲壮感のバランスを重視したい。前半は情感豊かな音色で哀しみを描き、後半は音に厚みを持たせ、乱世の悲壮さと人の繊細な心情を届けられるよう努める。

犬伏 由奈　Pf. 原田 愛

J.リュエフ / シャンソンとパスピエ
J. Rueff / Chanson et Passepied, Op. 16

本作品は、1950年代初頭にフランスの女性作曲家ジャニーヌ・リュエフ（1922~1999）によって書かれた。
リュエフは、マルセル・ミュールが主任教授を務めていたパリ音楽院のサクソフォン科で伴奏助手を務めた経験を持ち、サクソフォン奏者たちとも深い交流を持っていた。そのため、サクソフォンのための作品を数多く残しており、現在でもサクソフォンの重要なレパートリーとして親しまれている。
『シャンソンとパスピエ』は、シャンソン(歌)とパスピエ(舞曲)という二つの異なる性格を持つ部分から構成される。前半のシャンソンでは、伸びやかで歌心に満ちた旋律が特徴的であり、サクソフォンの豊かな音色を生かしながら、繊細な感情の移ろいが表現される。後半のパスピエでは一転して軽快なリズムが現れ、古いフランス舞曲を思わせる優雅さと躍動感が感じられる。

F.デュクリュック / ソナタ
F. Decruck / Sonata

本作品は1943年に、フランスの女性作曲家フェルナンド・デュクリュック（1896~1954）によって書かれた。
デュクリュックはパリ音楽院で和声、対位法、フーガ、オルガンなどを学び、作曲家として約200曲に及ぶ作品を残している。その中でもサクソフォンのための作品は40曲以上にのぼり、サクソフォンの豊かな音色や表現力を生かした作品を数多く作曲した。
『ソナタ 嬰ハ調』は、全4楽章から構成されている。
第1楽章「Très modéré, expressif」は、抒情的な旋律と対照的な音楽が展開される、表情豊かな楽章である。第2楽章「Noël」では古いフランスのクリスマス・キャロルが用いられ、穏やかで幻想的な雰囲気が広がる。第3楽章「Fileuse」は「糸を紡ぐ女」を意味し、サクソフォンの細やかで軽やかな動きによって、糸を紡ぐ様子が描かれている。第4楽章「Nocturne et Rondel」は、静かで叙情的な「Nocturne」から、躍動感のある「Rondel」へと移り変わり、最後は華やかなコーダによって作品を締めくくる。
美しい旋律が印象的な場面から、軽やかな動きが続く場面、そして華やかに曲を締めくくる場面まで、楽章ごとに変化する音楽の表情に注目したい。

I.ゴトコフスキー / ブリランス
I. Gotkovsky / Brillance

本作品は1974年に、フランスの女性作曲家イダ・ゴトコフスキー（1933~2025）によって書かれた。
ゴトコフスキーは、ヴァイオリニストであるジャック・ゴトコフスキーの娘として生まれ、幼い頃から音楽に親しんで育った。パリ国立高等音楽院ではナディア・ブーランジェやトニー・オーバンに師事し、数々の賞を受賞した。管弦楽や吹奏楽、室内楽、器楽、声楽など幅広いジャンルの作品を手がけ、特にサクソフォンのための作品を数多く残している。彼女の作品には、高度な技巧と豊かな表現力に加え、感情を率直に表現する力強さが感じられる。
『ブリランス』は、全4楽章から成る作品である。題名のブリランスは、フランス語で「輝き」を意味する。第1楽章「Déclamé」は語るように自由で叙情的、そしてエネルギッシュな音楽、第2楽章「Désinvolte」は軽快で遊び心のある音楽、第3楽章「Dolcissimo」は柔らかく甘美な音楽、そして第4楽章「Final」は技巧とエネルギーに満ちた音楽が特徴的である。
この作品の魅力は、題名が示す「輝き」が、ただ明るく華やかなものだけではないところにある。激しいエネルギーや軽妙なユーモア、繊細な歌心など、さまざまな表情が交錯することで、より鮮やかな輝きへと変化し続ける。闇があるからこそ光が際立つように、静けさや繊細さがあるからこそ、力強く感情を解き放つ音楽がより印象的に響く。技巧的な華やかさだけでなく、その奥にある多彩な感情にも耳を傾けながら、この作品唯一の輝きを感じていただきたい。

粟飯原 叶翔　Pf. 原田 愛

A.シャイユー / アンダンテとアレグロ
A. Chailleux / Andante et Allegro

本作品はフランス生まれの作曲家、アンドレ・シャイユー（1904~2000）によって作曲された小品である。
その名の通り、緩やかで優美なアンダンテと軽やかで弾むようなアレグロという対照的なふたつの場面で構成されている。
3分ほどのコンパクトな作品ではあるが、その中にも奇数と偶数のポリリズム、フランスらしいお洒落な和声、目まぐるしく移り変わる調性など飽きのこない展開が特徴的であり、作者の技法の鮮やかさが見て取れるだろう。
歌い上げるような旋律にも軽い足取りで踊るようなパッセージにも、要所に感じさせるエスプリが非常に味わい深い1曲である。

C.ドビュッシー (編曲:V.ダヴィッド) / ラプソディ
C. Debussy (arr:V. David) / Rhapsodie

クロード・ドビュッシー（1862~1918）はフランス、サン＝ジェルマン＝アン＝レー生まれの作曲家である。
10歳の時にパリ音楽院に入学。元はピアニストを志しての入学だったが、挫折を経て作曲家の道へ転身し、21歳でローマ大賞を受賞。
その後も音楽家としての活動の中で世界各地の様々な文化の影響を受け「印象派」と呼ばれる自身のスタイルを確立した。
奔放な生き様から話題性には事欠かず、また独自の音楽的スタイルは多方面に鮮烈な影響を与えている。
『ラプソディ』はその生涯の後半に差し掛かった1901年に委嘱を受け、生み出された作品である。
アメリカの女性サクソフォニスト、エリザ・ホール（1853~1924）の委嘱を受けたドビュッシーは当初彼女やサクソフォンという楽器自体の能力を好意的に感じておらず、それ故に気乗りせず完成までに長い歳月を費やした。
なお、ドビュッシーの死後、ジャン・ロジェ＝デュカスが遺稿をもとに演奏用の版を整え、1919年に初演された。
上記のような経緯をもって生まれてきた作品ではあるが、ドビュッシーの生涯を通して醸成されてきた特有のスタイルが色濃く反映されており、音楽的・学術的価値は非常に高い。
『ラプソディ』の名の通り自由奔放な形式や各所に散りばめられた民謡風のテクスチュアが特徴的であり、またフランス近現代を象徴する浮遊感のある和声やバラエティに富んだリズムとの絡み合いが極めて美しい1曲である。

P.クレストン / ソナタ 作品19
P. Creston / Sonata, Op. 19

ポール・クレストン（1906-1985）はイタリア系アメリカ人の作曲家、オルガニスト。
貧しいシチリア系移民の子としてニューヨークに生まれ、それゆえに音楽学校などで学ぶことはなかったが、幼少の頃より個人レッスンでピアノとオルガンを学んだ。
本格的に作曲家を志し始めたのは26歳の時だが、オルガニストとしての活動の傍ら独学で作曲を学び、後にニューヨーク批評家協会賞を受賞するなど遅咲きながらも着実に作曲家としての名声を高め、米国の音楽家団体で要職に就いたり、指導者として教壇に立ったりするようになった。
とりわけリズムの分野に造詣が深く、1964年には「リズムの原理」という理論書を著している。
交響曲、協奏曲、室内楽、吹奏楽、歌曲など様々なジャンルの作品を残しているが、サクソフォンのための作品も残しており、サクソフォンの世界の中でも欠かせない作曲家といえるだろう。
本作品は1939年に作曲され、同胞のサクソフォン奏者セシル・リースン（1902-1989）に捧げられた全3楽章からなる13分ほどの作品である。

第1楽章：With Vigor（精力的に）
4/4拍子の快速な楽章。アグレッシブな提示部、緩徐的な風合いをもつ展開部、再度アグレッシブな再現部を経てコーダ、といった流れの保守的なソナタ形式で構成されている。
第2楽章：With tranquility（静謐に）
5/4拍子の緩徐的な楽章。寄せては引く波のようなフレーズをもつドラマチックな音楽。
第3楽章：With gaiety（陽気に）
2/4拍子の軽妙な楽章で、技術的にも高いレベルが求められる。ヘミオラが多用されており、クレストンのリズムの真髄が垣間見える。

ドビュッシーのラプソディ同様その音楽的・学術的価値ゆえに現代でも非常に演奏機会が多く、クラシックサクソフォンのマスターピースといえる位置付けを占めている。
意匠を凝らしたリズム、そしてバラエティに富んだキャラクターが魅力的な作品である。